

研究ノート

基礎看護学実習 I 実施前後における 看護大学 1 年生の向社会的行動の変化

Comparison of prosocial behavior by nursing university first graders
before and after basic nursing practice I

岡田郁子 山口さつき 泉澤真紀

Ikuko OKADA, Satuki YAMAGUTI, Maki IZUMISAWA
保健福祉学部保健看護学科

キーワード：看護基礎教育, 看護大学生, 向社会的行動, 基礎看護学実習

抄 録

向社会的行動とは、相手に思いやりをもち相手のためになるよう意図して行う行動のことであり思いやり行動ともいえる。本研究の目的は、看護基礎教育における向社会的行動を育む方法を見出すため、看護大学 1 年生の基礎看護学実習 I 実施前後における向社会的行動の変化を比較検討することであった。分析対象者は A 大学看護学部 1 年生のうち、基礎看護学実習 I 実施前 29 名、基礎看護学実習 I 実施後 22 名である。向社会的行動は、菊池が作成した向社会的行動尺度を用いた。基礎看護学実習 I 実施前後の比較は向社会的行動全体では t 検定を、各質問項目別では Mann-Whitney の U 検定を用い検討した。向社会的行動は、基礎看護学実習 I 実施前後で変化はみられなかった。各質問項目別では、20 項目中 3 項目で変化していた。チームワークづくりなど実習グループメンバー間の相互の関わり、共感のモデルとなる事、自信を持つ声かけ、実際の患者の状況を目の当たりにすることなどが向社会的行動を向上させていた。基礎看護学実習 I において、向社会的行動の向上に向け、各自自信をもち自ら考え行動していけるよう支援する必要がある。

I. はじめに

看護は、病院のみでなく健康増進を目的とするさまざまな場、あらゆる年代の対象者およびその家族、集団、コミュニティを対象とする。看護には、健康増進および疾病予防、病気や障害を有する人々あるいは死に臨む人々のケアが含まれる。常に相手に関心をもつこと、コミュニケーション能力、患者の情報を引き出し捉える力、より良いケアを行いたいという意欲、自己を分析し振り返ること、常に成長していけるよう学び続ける姿勢も必要もある。その繰り返しが自分自身を成長させ、より充実したケアを模索し実践することへ結びついていく。その根底には、常に状況をよく読み取り、時には共感し、対象者の気持ちに寄り添う姿勢が重要である。

看護を必要とする対象者の状況は様々であり、その状況を常に的確に読み取り看護する必要があるが、近年新卒看護師の問題解決能力の低下¹⁾、看護学生のコミュニケーション能力の低下が指摘され、それにともない臨地の場で必要とされる対人関係の構築に相当時間を要するため、平成 21 年度からのカリキュラムでは看護学生のコミュニケーション能力の育成が課題とされている²⁾。また、近年の社会情勢の変化に伴う子どもの社会性の低下が深刻に捉えられ、子どもが社会規範を身につけるための道徳教育重視の政策が期待されるとともに、家庭での教育の変化も深刻な社会問題となりつつある³⁾。地域の人達と関わる機会が減り、家庭環境は核家族化がみられ、あらゆる年代の人との関わりが減りコミュニケーション能力を得る機会が減少し、価値観を広げる或いは自分を認めてくれる機会や

環境が限定されていることがコミュニケーション能力の育成を妨げている可能性がある。

また、看護において対象者を理解し、相手の立場に立って最善の方向へ支援する知識と能力が必要であり、その根底に「どのような状況であっても相手を思いやること」が必要である。現代の看護学生は「対人関係が不得手」「相手のことに立ち入ろうとせずさめている」傾向があるとされ、やさしさと思いやりの薄れが指摘されている⁴⁾。コミュニケーション能力や社会性の低下だけではなく、看護の根底に必要な、看護の模索や追及に結びつく思いやりが希薄化することは対象者への看護の質低下にも結びつくことが懸念される。実際研究者も臨地において、新卒看護師の患者への興味・関心、自己成長させる意欲、何より対象者にとってより良いケアを追及しようと相手の身になって真剣に考え周囲の看護師とかかわりながら試行錯誤する様子に変化を感じることがある。急性期医療に対応するための臨地の忙しさ、看護に限らず業務に適応することに集中しゆとりがないことも理由として考えられるが、臨地実習中の看護学生にも同様の傾向がある。自分の興味、関心のない部分は認識されない場合があり、臨地実習の指導はそれを気付かせる関わりから始まる。対象者の辛さを克明に説明することで認識しはじめ、今までとは違った視野や価値観に気づく力の育成が基礎看護学実習では重要であり、それとともにケアの見学や体験を通して看護の実際をみて学び、動機づけを行い、専門的知識を現実と結びつくようかわる。小中高生に行った調査では、「勉強が得意だ」と感じるものほど共感・互助志向が弱い結果がみられ、学校の知識を首尾よく身につける意味を個人的な成功に限定し、他の人を支え・助けるための社会的な資源の獲得として捉える意味づけが欠如している可能性を示唆している。また、日本のPISA (Programme for International Student Assessment : 生徒の学習到達度に関する調査) 調査で一貫した傾向として、多様な知識を関連づけ本質を理解する「概念的理解」が不得意であり、解き方が一定に定まらない否定形問題を自分なりに考えそのプロセスや理由などを説明したうえで深く理解して問題を解決に導くこと(わかる力)が相対的に苦手な記述形式の問題には無回答率が高く、日常的事象に関連づけて説明する概念的理解が不十分であるとされる。「正しい答え」のみが重視されると「暗記・再生」型学習観が強まる傾向があり、「正しい答え」や「得点」が過度に強調されると「正しいと思えないものは書いても仕方がない」といった意識が強ま

り無回答となっているとのことである。中学生から高校生にかけての時期、ピアジェが提唱した論理的思考の発達第4の段階、現実を可能性の一つとしてみる思考、潜在的要因の抽出、仮設演繹的思考が可能となる「形式的操作期」の完成期にあたり、見えない世界やその質を捉え、現象の背景にある要因に着目するようになり、高校生の後半「弁証法的操作」が芽生えるのごとをひとつの側面からだけでなく、別の側面から見たときどう見えるか、或いは二つの異なる立場がある時その葛藤をどのように解決していくか考えるようになる⁵⁾。看護では起こっている現象の要因、これから起こりうること、その時の心理状況など多面的にものごとを捉え深く考える力、アセスメント能力が不可欠である。大学教育として論理的思考の更なる育成はもとより、看護大学生として深い洞察力により相手の身になって考え行動できる人材育成が求められている。

思いやりをもった行動は、心理学では「向社会的行動」と呼び、相手のためになることを意図して行う行動は「援助行動」または、社会のために有益な行動であることから「向社会的行動」とよんでいる⁶⁾。向社会的な行動は他人との気持ちのつながりを強めたり、それを望ましいものにしよとする場合にとられる行動のことでもある⁷⁾。例えば共感を発達させるためには「安定した初期の愛着」「両親の愛情」「共感的モデルの存在」「誘導的なしつけ方法」「他人と類似している点に注目させること」「過度に対人的な競争をさせないこと」「肯定的な自己概念をもたせること」が必要である。共感とは他の行動の先行条件であり、共感を誘発する条件では人は向社会的行動をとる⁸⁾。また、一般的にも共感とは向社会的行動に影響するとされている。向社会的行動に影響する要因に関する研究として、鈴木⁹⁾は一般の大学生を対象に調査しており、共感性が高く、外交的な人は向社会的行動をとりやすい傾向にあり、社会的スキルは向社会的行動に影響していないことを示唆している。また、松永¹⁰⁾は一般の大学生を対象に調査し、共感性と向社会的行動には高い相関がみられ、相手の感情を共有し、その人が何を求めているかわかる人ほど向社会的行動をとりやすいと述べている。

看護における研究では、看護学生を対象に思いやりに影響する要因を調査し、「労働体験」「家族構成」「家庭のしつけのタイプ」「ボランティアでの関心」「看護師への志望動機」が影響していることが明らかにされている⁴⁾。菊池¹¹⁾は、家庭で教えられたことと別の行

動や態度、価値を文化が強調する場合は、子どもの中に葛藤が生まれ、この葛藤が向社会的行動の発達に影響を与えることがあるとし、社会化経験が認知機能や認知能力に影響を与えるとも述べている。臨地実習で臨地実習指導者などの看護師と関わることは社会化導入の段階であり、それがものごとにとらえを変化させることにも結びつくと思われる。共感が向社会的行動に影響していること、臨地実習指導者や看護教員の関わり、また基礎看護学実習 I における看護の対象となる患者のことを真剣に相手の身になって考え行動できるよう努力することで向社会的行動も強化されることが考えられる。基礎看護学実習は看護を学ぶ動機づけとなり、基礎看護学実習 I は入学後はじめて病院で行われている看護の実際を目の当たりにし、自分のなりたい看護師像を描ききっかけとなり、少しでも相手の役に立つことを望み、相手のことを更に考えることに結びつくと思われる。

先行研究より、一般大学生に関する向社会的行動に影響する要因は明らかにされているが看護大学生を対象とした研究は少なく、基礎看護学実習前後での向社会的行動の変化については明らかにされていない。看護の根底に重要である看護大学生の思いやりに影響している要因は何か、臨地指導者、看護教員のどのような関わりが向社会的行動を促進するか検討することで、看護大学生を支援するかかわり方の指標の一部ともなり、看護大学生自身の変化、看護を必要とする対象者への看護の質向上への一助となると考える。そこで、本研究の目的は、看護基礎教育における向社会的行動を育む方法を見出すため、看護大学 1 年生の基礎看護学実習 I 実施前後における向社会的行動の変化を比較検討することとした。また、臨地実習指導者や看護教員のどのようなかかわり、態度、言葉が看護大学生の向社会的行動の発達を促進するか検討する。

II. 研究 方 法

1. 対象者

A 大学に所属する看護大学生 1 年生 59 名

2. 研究期間

2013 年 10 月 21 日～2014 年 3 月、基礎看護学実習 I 履修前後でアンケート調査を実施した。

3. データ収集方法

アンケート調査は留置法とし、配布の際研究参加へ

の任意性、無記名であること、データの扱いは厳重に行い第三者への漏洩を予防することを説明した。

4. 調査内容

基本属性は、年齢、性別、尊敬する人の有無である。

向社会的行動については、菊池¹²⁾の作成した「向社会的行動尺度 (大学生版)」を使用した。信頼性・妥当性ともに検証されている。質問項目は 20 項目、「したことがない」「一度したことがある」「数回したことがある」「しばしばした」「いつもした」の 5 段階評定であり、順に 1～5 点とし 20 項目の得点を単純加算し、得点が高いほど向社会的行動の傾向が高いことを示す。

基礎看護学実習 I 実施後の調査では、実習指導における向社会的行動の発達に影響したと考える看護教員、臨地実習指導者、患者との関わりについて、どのようなかかわり・態度・言葉が自分の思いやりの状況を気付かせ、発達させたか自由記載とし、具体的な記述を求めた。

5. 分析方法

基礎看護学実習 I 実施前後の比較は、向社会的行動全体は t 検定を、各質問項目別では Mann-Whitney の U 検定を用い分析した。統計ソフト SPSS (22.0J) を使用した。

6. 倫理的配慮

本研究は研究者の所属する A 大学研究倫理委員会の審査をうけ承認後実施した。また、学生へは書面にて本研究の主旨・目的・方法、研究参加の任意性、研究結果は学会・学術誌で発表するが個人情報保護、厳重な情報管理に配慮することを説明し、質問紙の回収箱への投函をもって同意を得た。

III. 結 果

基本属性では、平均年齢は基礎看護学実習 I 実施前 19.4±3.8 歳、実施後 19.9±2.4 歳であった。性別は基礎看護学実習 I 実施前：女性 26 名 (89.7%)、男性 3 名 (10.3%)、実施後：女性 22 名 (100%) であった。「尊敬する人」の有無は実習前：あり 24 名 (85.7%)、なし 4 名 (14.3%)、実習後：あり 18 名 (81.8%)、なし 4 名 (18.2%) であった (表 1)。

向社会的行動合計得点は実施前 60.4 (±13.8)、実施後 54.4 (±10.4) であり、実施後低下傾向であるが有

意な差はみられなかった(図1)。各質問項目別に実施前後で比較した結果 20 項目中 3 項目で有意な差がみられ、質問項目 1:「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる」は実施前 3.0±1.2, 実施後 1.9±1.0 と有意に低下し ($p < 0.01$) (図2), 質問項目 11:「酒に酔った友人などの世話をする」は実施前 1.6±1.2, 実施後 2.3±1.5 と有意に増加 ($p < 0.05$) (図3), 質問項目 20:「自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる」では実施前 2.6±1.4, 実施後 1.7±1.0 と有意に低下していた ($p < 0.05$) (図4)。

尊敬する人の有無による向社会的行動合計得点は、

実習前:あり 59.7±14.3, なし 57.3±9.5 で有意な差はみられず、実習後:あり 55.7±10.8, なし 48.5±5.8 で有意な差はみられなかった。

どのようなかわり・態度・言葉が自分の思いやりの状況を気付かせ、発達させたかについての自由記載では、臨地実習指導者との関わりで気づききっかけとなったことは「コミュニケーションについて、世間話をするためのものではなく、患者の負担も考え行った方がいいという助言を受け、コミュニケーションについての考え方が変わった」「なぜ見学したいのか、見学する内容を事前に自己学習したか問われ、自分に対し

表 1 分析対象者の基本属性

項目	実習前 (n=29)		実習後 (n=22)		
	度数	度数%	度数	度数%	
平均年齢 ±SD		19.4±3.8		19.9±2.4	
性別	男性	3	89.7	0	0
	女性	26	10.3	22	100
尊敬する人の有無	あり	24	85.7	18	81.8
	なし	4	14.3	4	18.2

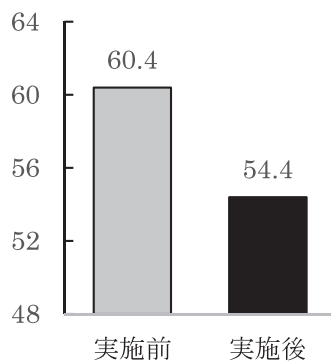
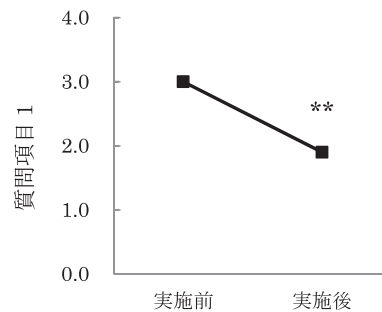
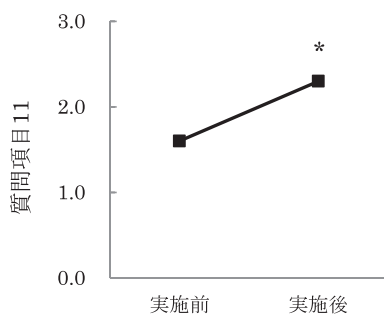


図1 向社会的行動合計得点



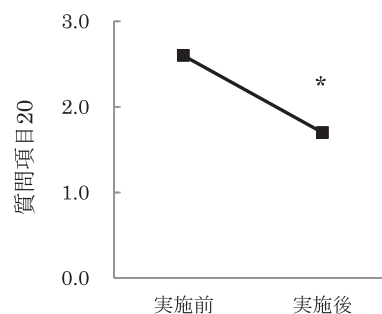
** : $p < 0.01$

図2 質問項目 1 の変化



* : $p < 0.05$

図3 質問項目 11 の変化



* : $p < 0.05$

図4 質問項目 20 の変化

真剣に指導しようとしてくれているのだと思嬉しく、人に対し何かを言う時には真剣な態度で接していく必要がある」、動機づけとなったことは「看護は見返りを求めるものではないが患者さんからのありがとうは頑張ったからもらった言葉でありこれからは自信を持って頑張るとい言葉をもらい、大学に入学して初めて本気で看護師になりたいと思った」であった。看護教員との関わりで気づききっかけとなったことは「実習に緊張していたが、色々な場面で先生が見てくれて気づいてくれていた」であり、患者との関わりで気づききっかけとなったことは「患者の疲労を目の当たりにしたこと」「患者さんから自分のことを聞かれ、自分に興味を持ってくれたと感じた、自分自身も他の人に対し興味をもって質問することが大切だと感じた」であり、動機づけとなったことは「患者が疲労したことから、もっと患者の様子を常時観察するべき」などであった。

IV. 考 察

向社会的行動の合計得点は、基礎看護学実習 I 前後で低下傾向にあるが変化はみられなかった。

大澤¹³⁾らは看護教員の看護学生との実習指導における関わり方を検討しており、「対話的リフレクション」を用いた実習指導の有効性として、「学生の直接的体験の把握」「不安や困難などの明確化」「学習可能内容を考え、助言・提案する」「かかわりの方向性を考え、伝える」「経験の意味づけの援助」の5つのカテゴリーに分類し、対話による学生自らの自己の気づきを意識化し、行動を振り返るとともに実習目標や自己課題を明確にすることができていたことを明らかにしている。実際、基礎看護学実習 I においても、看護教員および臨地実習指導者は看護大学生が患者とコミュニケーションをとった後、ケア技術見学、実施後などともに振り返りリフレクションすることを心掛けている。そこで、看護における行動、言動の一つひとつが意味づけられ、有効性などが認識され、自分自身の改善策を考える。臨地実習指導者との関わりで気づききっかけとなったこととして「…コミュニケーションについての考え方が変わった」があった。表現された言葉は直接向社会的行動に影響するとは思われない内容ではあったが、看護師は患者の生命を預かり、日々少しでも安楽に過ごせるようケアを行っている。看護大学生に新たな価値観が芽生えた可能性があり、臨地実習指導者の真剣に看護に向き合い、学生自身にも真

剣に向き合う姿勢から表面的な優しさだけではなく、状況を的確に捉え深く考え、根本で確実に相手の身になって考えている姿勢から、それが看護師の優しさや思いやりであると実感し、看護の視点が芽生えてきたためともいえる。看護は、時には患者の痛みをコントロールしながら合併症予防のため早期離床を図る。また歩くなど少し時間を要しても残存機能を生かし自分でできることを促す。看護師特有の患者を思った行動でもあり、基礎看護学実習前迄は相手のために援助できることは全て実施することが優しさであると思っていた看護大学生の価値観に変化が生じたことが考えられる。向社会的行動全体の変化がみられず低下傾向にあった要因として、一側面からのみではなくあらゆる視点から状況を捉える必要性を認識したことで思いやり行動である向社会的行動のあり方にも多面性を感じこのような結果となったとも考えられる。

各項目別の結果では、1項目「酒に酔った友人などの世話をする」のみが増加し、「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる」、「自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる」は低下していた。

1項目が増加していた要因として、一般大学生の友人関係の特徴として、互いの領域に踏み込まないよう関係の深まりを回避する「表面的-内面的関係」、互いに傷つけあわぬよう気を遣う「気遣い関係」、楽しさを追求し群れる「群れ関係」の3つがあるとされる¹⁴⁾。基礎看護学実習 I の前は一般的な大学生の関係性であったが、実習を通してお互いに励まし、情報共有しあうなど相互に関わりをもちチームワークがつけられ一体感なども経験する。友人関係が果たす役割は発達の段階により異なり、青年期になると友人関係の重要性が増し、友人との付き合い方に多様性が増し「自分の本音を出さない自己防衛的なつきあい方」などとともに「友人と積極的にかかわり相互に理解しようとするつきあい方」など、それまでの経験や価値観によりつきあい方も異なるとされ¹⁵⁾、基礎看護学実習 I で友人との関係性の価値観に変化が生じたとも考える。太田ら¹⁶⁾は、男女ともに大学生の「共有活動」「相互理解活動」などの友人関係が向社会的行動の向上に影響していることを明らかにしている。今回の結果も基礎看護学実習 I でのそれらの友人関係が関連し向上したと考える。これらのことから、実習において看護大学生同士がお互いを理解しチームワークづくりに導くことが向社会的行動の向上につながると考える。

低下した2項目に関しては、対象が友人ではなく一般的である。人は思いやりのころがあっても相手の

当惑を心配し実施しない傾向があり¹⁷⁾、向社会的行動の阻止要因として、自身は親切のつもりでも相手にとって不快なのではないかという不安により行動に移せない若者が多いこと、幼児期の社会間接互惠性とは正反対の社会環境があり親切にした人間に親切が返ってこない現状が意欲を低下させているなどがある¹⁸⁾。基礎看護学実習Ⅰにより事象の深い洞察の必要性を認識し、すぐに援助することがよいかなど改めて考える必要性を認識したためとも考えられる。

臨地実習指導者・看護教員・患者とのどのようなかわり・態度・言葉が自分の思いやりの状況を気付かせ、発達させたかでは、臨地実習指導者の「…頑張ったからもらった言葉でありこれからは自信を持って頑張ると言う言葉をもらい、大学に入学して初めて本気で看護師になりたいと思った」、看護教員との「実習に緊張していたが、色々な場面で先生が見てくれて気づいてくれていた」などがあつた。菊池¹⁹⁾は、共感を発達させるものとして先にも述べたように「共感的モデルの存在」「誘導的なしつけ方法」「肯定的な自己概念をもたせること」をあげており、今回の結果からも実際に看護大学生との関わりで臨地実習指導者や看護教員が支援していたことであつた。共感とは向社会的行動と関連している。看護大学生が体験したことを、指導する者がともに振り返る機会を持つ。その中で看護大学生に現状が認識されるよう、また自信が持てるよう言葉をかけ、モデルとなり共感の発達を支援することで相手の身になって深く考える基盤づくりに結びついていき、それが結果的には向社会的行動に繋がっていたと考える。また、患者との関わりで「患者の疲労を目の当たりにしたこと」が思いやりへの気づきとなつていた。学内における講義で患者の状況は説明しているが、紙面上と違い実習という実際の現場や患者から直接うける言葉からの学びは大きく、看護大学生の共感する表情など反応は驚くほど顕著である。今回の結果も直接患者の辛さを実感し、思いやることの必要性を更に認識させ、動機づけたと思われる。

しかし、先にも述べたように基礎看護学実習Ⅰのはじめなどでは状況を認識する力が弱い傾向にある。実習で、現状を細かく捉えなおし、次の行動を変容できるとともにより感性豊かにものごとを見ることができるよう支援する。しかし、インターネットの普及など現代の高度情報化社会により増加する過大な情報に振り回され脳はオーバーフロー状態ともいわれ、情報に疲弊している脳は新たな情報が目の前にあつても注意してみることができなくなる可能性がある²⁰⁾。看護

大学生は患者の状況やケアの方法など目の前の事象に注意を向け意識する力をつける必要がある。注意とは「多くの情報の中から情報を選択する心的機能」であり、あらゆる情景や情報が目の前にありその中から注目すべき部分を選択する能力をまず養う必要がある。次に意識には3つの種類がありその一つとして「気づき」がある²¹⁾。注意することで、あらゆる情報から認識すべきことをまず選択し、更に細かく情景なども含めて気づく能力を磨く必要があるということである。そこから深い洞察やリフレクションへ結びついて行く。基礎看護学実習Ⅰを含め臨地実習全体でものごとにまず注意して見る力、気づく力、そして深く洞察する力を育成するよう段階をおって支援することが患者の実際の状況を更に理解することに繋がり向社会的行動の向上に結びついていくものと思われる。また、学内で重要な技術を看護大学生に教え、体得できたとき周囲にも伝えるよう説明するがライン（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）で伝達され、技術の詳細さと細かく配慮する点、背景など現象の見えない世界までは伝えきれていないことがあつた。短絡的な情報はそれで伝達可能であるが、ラインの普及などは伝達方法や言葉の表現も短絡的となる可能性がある。看護技術にはじまり看護全般見えない世界を模索し、患者の目線に立った包括的なケアが必要とされる。感性を磨き、見えていない潜在要因をより深く探求していけるよう、また短い文章ではなくその情景などを明確に相手に伝える力をつけて行けるよう臨地実習や学内での講義、演習でもかかわっていく必要がある。

チームワークづくりなど実習グループメンバー間の相互の関わり、共感のモデルとなる事、自信を持つ声かけ、実際の患者の状況を目の当たりにすることなどが向社会的行動を向上させていた。看護大学生は全般的に、援助を必要とする人に看護することを望み看護師を目指し入学してくるため思いやりのところがある。しかし、なかには相手の当惑を心配し実施しないことも考えられる。向社会的行動ができるよう、各自自信をもち自ら考え行動していけるよう支援する必要がある。

看護大学生は基礎看護学実習Ⅰのなか、実際に向社会的行動がみられない場合でも、よく状況を考えようとする力が芽生えている。短絡的に考え行動するのではなく、あらゆる側面から状況を捉えようと努力することで混乱し行動できない場合もある。何について考え戸惑っているかよく聞き出し、状況を読む力、アセスメントする知識、能力の向上のため支援し、その中

で相手のことを常に考え思いやりを持って行動できるようその必要性和有効性を説明し意味づける関わりが重要と考える。実習という実践の場を通して知識の定着を図り、それらをもとに自ら対象者の安楽を考え状況を深く洞察し行動できるよう、思いやりを根底にもち、なりたい看護師像を描きよりよい看護探求のため論理的に考えられるよう関わる必要がある。

V. おわりに

本研究にご協力いただきました看護大学生の皆様へ深く感謝いたします。なお、本論文は第 42 回日本看護研究学会学術集会で発表したものに加筆修正したものである。

引用文献

- 1) 柘植美幸, 奥村志保子, 杉浦浩子: 集団面接から把握した新人看護師の問題解決思考の変化, 日本看護学会論文集 看護管理 (1347-8184) 42 号, 42-45, 2012.
- 2) 石光美美子, 古谷 剛, 林美奈子: 看護大学生の半年間にわたる臨地実習前後の社会的スキルの変化, 目白大学健康科学研究 (1882-7047) 5 号, 61-66, 2012.
- 3) 尾関美喜, 朴 賢晶, 中島 誠, 吉澤寛之, 原田知佳, 吉田俊和: 社会環境が子どもの向社会的行動に及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学) (1346-1729) 55 巻, 47-55, 2009.
- 4) 高橋永子: 看護学生の思いやり行動に影響する要因の明確化に関する研究, 看護・保健科学研究誌 (1345-983X) 6 (2), 9-18, 2006.
- 5) 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会:

- カリキュラム・イノベーション 新しい学びの創造へ向けて, 東京大学出版会, 37-74, 2015.
- 6) 石本雄真, 勝間理沙, 山崎勝之: TOP SELF ベース総合教育「向社会的性の育成」における目標構成, 鳴門教育大学研究紀要 第 27 巻, 296-310, 2012.
 - 7) 菊池章夫: また/思いやりを科学する, 川島書店, 5, 1998.
 - 8) 同 6) 99-107.
 - 9) 鈴木隆子: 向社会的行動に影響する諸要因—共感性・社会的スキル・外向性—, The Japanese journal of experimental social psychology, 32 (1), 71-84, 1992.
 - 10) 松永 健: 思いやり行動の精神力動 共感性と自意識を中心に, 臨床心理学研究 (10), 99-113, 2012.
 - 11) 菊池章夫, 二宮克美: N. アイゼンバーグ/P. マッセン思いやり行動の発達心理, 金子書房, 46, 1991.
 - 12) 菊池章夫: 心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる (対人関係・価値観), サイエンス社, 178-182, 2008.
 - 13) 大澤妙子, 富澤美幸: 対話的リフレクションを用いた実習指導法の検討, 日本看護学会論文集: 看護教育 (1347-8265) 40, 164-166, 2010.
 - 14) 安藤寿康, 遠藤利彦, 岡本祐子, 河合優年, 下山晴彦, 白井利明他: 発達心理学, 新曜社, 149, 2008.
 - 15) 同 14) 148, 2008.
 - 16) 太田直美, 米澤好史: 大学生の向社会的行動と友人関係及び自己像の形成との関連, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 22, 29-39, 2012.
 - 17) 同 11), 78, 1991.
 - 18) 三橋真人: 大学生における向社会的行動の阻止随伴性の関係, 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究 16, 109-115, 2014.
 - 19) 同 7) 99-104, 1998.
 - 20) 芋坂直行: 注意をコントロールする脳 神経注意学からみた情報の選択と統合, 新曜社, 95, 2013.
 - 21) 同 20), 121-133, 2013.